



## 「自伝文集」の出版と社会的アイデンティティの形成：金成『私の獄中記』（1976）を事例に

著者	金 成?
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	3
ページ	276-311
発行年	2017-03-24
権利	同志社コリア研究センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016107">http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016107</a>



## 「自伝文集」の出版と社会的アイデンティティの形成：金成『私の獄中記』（1976）を事例に

著者	金 成?
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	3
ページ	276-311
発行年	2017-03-24
権利	同志社コリア研究センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016107">http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016107</a>

## 7 「自伝文集」の出版と

# 社会的アイデンティティの形成

—金玟燮『私の獄中記』（1976）を事例に—

キム ソン ヨン  
金 成 妍

### 1. 序論

人間の肉体は有限であり、その存在に関する記録は持続的に残すことができる。これを認知している個人は「記憶される自己」の形成を予感し、個人記録（ego document）を残す。こうして残された「日記、回顧録、手記、自叙伝」などの自伝的叙事は、後世が歴史的な個人の内面を理解するのに役立つ通路として活用され、人物の社会的イメージを形成する叙事的な基盤になることもある<sup>1</sup>。特に、近代以降の日記はもっとも内密な私的記録が近代的な出版を通じて公開・共有されることによって、社会的な意味を確保し、「個人の生涯を文章化し、不滅の生命力を与えるという点<sup>2</sup>」で注目に値するジャンルである。

日記の「執筆、連載、出版、読書」は「個人的・歴史的事件」であり、「社会・文化的な現象」である。個人は、既存の日記をつづる慣習の影響のなかで日記を記述するのみならず、それを社会的につくり出すこともま

<sup>1</sup> イヌンシ 李瞬臣の『乱中日記』とユンチヘ 尹致昊の日記が代表的な例で、これらのテキストは人物の内面と思想、アイデンティティを照明する素材として活用されてきた。筆者は、人物の個人的な叙事にもとづき、社会的イメージが固定される現象に関して、ヘレン・ケラーの事例を挙げて論じたことがある（김성연 「근대의 기적 서사 <헬렌 켈러 자서전> 의 식민지 조선 수용 -“불구자”, “성녀”가 되다-」 『사이間 SAI』 13, 2012. 11.）。

<sup>2</sup> Philippe Lejeune, edited by Jeremy D. Popkin & Julie Rak, translated by Katherine Durnin, *On Diary*, University of Hawai'i Press, 2009, p.9.

た、日記をつづる筆者の社会的位置と出版文化の中で行われるようになる。そして何よりも、日記は筆者の社会的アイデンティティーを把握する叙事的史料として機能するようになるのである。すなわち、「日記」の社会的な存在の意味は、日記の「執筆－出版－読書」というすべての過程を見てはじめて正しく把握することができるのである。したがって、歴史的資料や精神分析の対象として還元されてきた日記を生産（執筆、出版）と消費（読書）のメカニズムのなかで把握し、アイデンティティーの叙事的な拠り所として機能するようになる方式を明らかにする作業が必要であろう。

1950年代以降、個人が自らのアイデンティティーを直接表現した回顧録、手記、自叙伝などの出版が本格化された。1960年代にはエッセイのブームがあり、1970年代には「ノンフィクション」が各種メディアの公募展を通じて国民に奨励されるに至った<sup>3</sup>。出版界にはさまざまな人物群像の叙事が氾濫していたが、その中でも『城北洞の鳩』（1969）の詩人で知られるキム グワンソブ金 珖 燮の『私の獄中記』（1976）は、いくつかの点において注目するに値する特異性を有している。自伝文集という表題の下に、日帝〔日本植民地〕時代の獄中日記と獄中回想記、病床記、そして自伝のエッセイで構成されているこの本は、出版された翌年に彼が故人となったため、作家唯一の自叙伝となり、『城北洞の鳩』とともに、彼の代表作として記憶されるようになった。

まずこの本は、歴史的人物や海外の人物の日記の出版が主流を占めていた当時としては



1969年当時の金珖燮

<sup>3</sup> 김성한 「1970년대 논픽션과 소설의 관계 양상 연구 - 『신동아』 논픽션 공모를 중심으로」 『상허학보』 32, 2011. 6.

珍しい同時代人の日記であった。そして著者の死後に出版されたのではなく、筆者が直接介入したもので、日帝時代における獄中記の出版物としても最初のものであった。また、日帝時代と4.19革命直後、そして植民地支配から解放30周年という民族史的な地層を貫通しながら、執筆・翻訳・連載・出版された。日帝時代における投獄という事件からはじまり、解放直後における李承晩<sup>イ・スンマン</sup>大統領の広報秘書官、晩年の闘病、そして『城北洞の鳩』の詩人として生まれ変わるという個人史的な屈曲をまとめる叙事を盛り込んだ個人記録という点において、問題作である。何よりも、老詩人の自伝文集が、1970年代当時若い進歩的な作家によって主導されていた創作と批評社（以下、<sup>チヤンピ</sup>創批）から出版されたという点がまた興味深い。

『私の獄中記』は、解放直後から1970年代に至るまで、「抗日—愛国—民族—民衆—国民の詩人」として認識された彼の生涯を「日帝時代の獄中記」を中心に集約させた叙事的な「単行本」であった。つまり、このテキストは個人的な叙事の出版が行われるメカニズムと、これを通じて形成される個人の社会的アイデンティティー、そして私的な記録が民族的な証言として回収され、彼のアイデンティティーに再び影響を及ぼすようになる現象を洞察することのできる端緒を提供してくれるのである。

本稿では、金玟燮『私の獄中記』（1976）がどのような社会文化的な脈絡の中で生成されたのかを実証的に検討し、それが再現するアイデンティティーを明らかにしたい。そこで、次の4点に注目する。第一に、金玟燮の獄中日記が執筆、出版された期間の1940年代から1970年代までの獄中記と日記の出版・読書の歴史に焦点を合わせることによって、どのような出版文化的な土台の上で『私の獄中記』が生成されたのかという点である。特に、1970年の日帝時代の回顧録の出版ブームと、1960～1970年代の獄中記・日記の出版物のなかで、金玟燮の『私の獄中記』を位置づけてみたい。第二に、当時、自伝的叙事としてまとめて認識されたりする「日記」と「回顧録」の亀裂を明らかにする。そして、自伝的な著述の個人的な動機と、

出版という社会的な事件の落差あるいは時差を考慮した分析の必要性を提起したい。第三に、金玟燮の「自伝文集」は植民地の獄中記と、解放後の病床記という受難の叙事で構成されることで、民族的・個人的なアイデンティティーの求心点として作用するようになる点である。植民地を経験した知識人の「思弁的な個人記録」が「公的証言」として生まれ変わり、民族の歴史として専有される現象を究明することによって、個人の叙事が社会的に記憶・伝承される方式を明らかにしたい。第四に、金玟燮が文壇で「抗日知識人」や「庶民の詩人」として記憶されるようになる契機となった創批との出会いの過程を見ていこうと思う。

このように、金玟燮の『私の獄中記』の事例を通して、個人的な叙事のジャンルにおける獄中記、日記、回想記の「執筆—出版—読書」のメカニズムを明らかにし、テキストの社会文化的な存在の意味を考察していきたい。一編のテキストは、叙事内容それ自体としてよりは、ジャンルに対する社会的な理解の中で受容される傾向があるので、まずは当時の「獄中記」と「日記」を把握した後に、テキストと筆者に対して分析をおこなっていこう。

## 2. 1970年代と『私の獄中記』

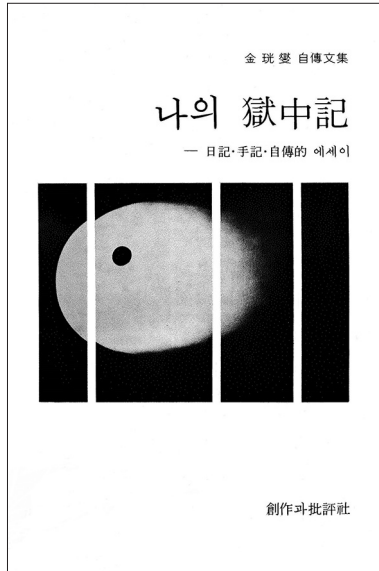
### (1) 解放30周年と獄中記の出版ブーム

1976年に出版された金玟燮の『私の獄中記』は、当時出版された獄中記あるいは日記のなかで抜きん出たものであった。この本は、「金玟燮の自伝文集」、「日記、手記、自伝的エッセイ」といったさまざまなジャンル名を掲げて出版されたが、「まえがき」や「序文」が前面に出された。日刊紙の新刊書評が注目する「もっとも長く重要な<sup>4)</sup>」叙事は「獄中日記」だっ

---

<sup>4)</sup> 엄무웅 「책 읽기, 글 쓰기, 책 만들기 -내가 살아온 시대의 가난한 초상」 『근대서지』 4, 2011. 12, 41쪽.

たのである。したがって、このテキストは「1970年代」という時代と「獄中記」の出版という、二つの変数における時の流れに対する理解のなかで、その社会的な存在の座標が把握され得るのである。



金玟燮『私の獄中記』（創作と批評社、1976年）のとびら

日帝時代にも獄中記は存在したが、だいたい収監者の体験記や手紙が新聞・雑誌の記事に活用された程度であった<sup>5</sup>。それらは、ゴシップ物の記

<sup>5</sup> 1930年代の新聞・雑誌の獄中記に関する記事の例を挙げると、次の通りである。임권근 「옥중기」『삼천리』 8, 1930. 9. (連載); 최상덕 「김자문자 옥중수기 1」『혜성』 1(7), 1931. 10. (連載); 「양근환 옥중기 동경부하 소관형무소 제3의 52방에서 수기」『삼천리』 4(5), 1932. 5. ; 「생사방황구년기-나의 옥중기」『삼천리』 7(7), 1935. 8. ; 「순교자 남종삼 옥중기 - 「기독교상」 등의 진품 희귀한 한국 금은화 60점 보전도서관에 기증」『동아일보』 1937. 12. 15.

事として消費される傾向にあり<sup>6</sup>、朝鮮人の獄中記は本格的な文学ジャンルや公的な記録としては共有されなかった。日本人<sup>7</sup>や外国人の獄中記は日刊紙に時折掲載され、代表的な例として、『東亜日報』に長期連載された大杉栄の『獄中記』<sup>8</sup>や、旧韓末〔大韓帝国期〕のフランス人宣教師フェリックス＝クレール・リデル（Félix-Clair Ridet）の獄中記<sup>9</sup>が挙げられる。このように、外国人や雑犯〔政治犯以外の犯人〕、思想犯などの獄中記が記事として少し紹介されたのみで、朝鮮人の獄中記が本として発行されたり、独立運動家の獄中記を正式に出版することはできなかった。

解放直後には、雑誌に韓龍雲<sup>ハンヨウン</sup>の獄中記が掲載されるなど<sup>10</sup>、日帝時代の独立運動家の獄中記が積極的に紹介された。しかし、獄中記の本は1960年代に至らなければ本格的に出版されなかったが、そのほとんどは解放直後の複雑な国内情勢のなかで量産された政治・思想犯たちの獄中記が主流を占めた。1962年に初版されて以降、たびたび再版された徐珉濠<sup>ソミンホ</sup>『私の獄中記』（同志社、1962）を筆頭に、高貞勳<sup>コジョンフン</sup>『歌われなかった歌（부르지 못한 노래）』（弘益出版社、1966）、崔永吾<sup>チェヨンオ</sup>『このまっ暗な墓で私を眠らせてくれ（이 잠깐 무덤에서 나를 잠들게 하라）』（協同文化社、1963）、梁秀庭<sup>ヤンスジョン</sup>『天を仰ぎ、地を見つめて（하늘을 보고 땅을 보고）』（徽文出版社、1965）などが、1960年代の代表的な獄中記である。これらは出版と同時に、ベストセラーとなり、数年間再版され、これらのうち、いくつかの獄中記は映画化されたりもした。『民族日報』編集局長であった梁秀庭の『天を仰ぎ、地を見つめて』（1965）は出版された年に3万部以上売れる「爆発的な人気を得たあと<sup>11</sup>」、1980年

6 「혈서의 참회록 : 동경의 「경성」도 지옥, 기아선상에서 방황타 과자 훔친 소년 절도범의 눈물의 옥중기」『동아일보』1937. 9. 22.

7 「일지사변 옥중관, 佐野学 (사노 마나부) 옥중기」『삼천리』10(1), 1938. 1.

8 「大杉栄 (오스기 사카에) 의 옥중기」『동아일보』1923. 10. 14. ~1923. 11. 25. (連載)

9 「한국 감옥의 옥중기, 천주교 신부 불란서인 리델 사회」『삼천리』12(4), 1940. 4.

10 「도선독립의 서 -한용운 선생 옥중기」『신천지』14, 1947. 4.

11 『경향신문』1991. 2. 23.



代までに7回以上再版され、初版が出版された年に映画としても制作されて、ベルリン映画祭に韓国作品として出品されたりもした<sup>12</sup>。

以上のように1960年代を経て、獄中記は「ベストセラー物」としての可能性を示し、センセーショナルな記事で紹介されて商業映画としても成功をおさめるなど、大衆文化のなかで商品性のある文化コンテンツとして活用された。1960年代の獄中記は、当時の政治社会的な事件と関連のある時宜にかなった産物であった。

日帝時代の投獄体験を記録した獄中記の出版は、1970年代に入ると本格化する。1975年、解放30周年を前後して日帝時代を回顧するという出版企画画物が数多く作られた。そして、これらの獄中記は全集というかたちの出版が活発化された当時の主流を反映し、全集としても出版された。代表的なものとしては、正音社が『光復30年文学全集1-10』（韓国文人協会編、1975）と『日帝下獄中回顧録1-5』（1977）を出版した。後者の『日帝下獄中回顧録』には、韓龍雲、朴烈、安重根、崔鉉培、金九などのよく知られている人物と、無名の者を含めた80余りの獄中記、獄中回顧録、獄中日記、獄中手紙などが網羅されている<sup>13</sup>。これ以前にそれぞれ異なる媒体に掲載された文章を「日帝下獄中回顧録」という題の下で収集・編集したこの全集は、80余りの個人叙事を「独立運動家たちの日帝下の受難史」、つまり「民族」の集団的な受難史として整理したものである。集団の歴史や事実の記録としてみなされたため、この全集には独立運動が専門の研究者であ

<sup>12</sup> 「무게있는 양심작 『하늘을 보고 땅을 보고』 『경향신문』 1965. 9. 29.

<sup>13</sup> 各巻はそれなりの基準で分類されているが、1巻は獄中詩歌、日記、獄中記、2巻はキリスト教徒の文章とオモニ〔母〕に送る手紙、3巻は日帝時代の新聞・雑誌に収録された獄中記、4巻はキリスト教の教役者の獄中記録、5巻は光復軍、修養同友会、朝鮮語学会などの事件と、集団別に分類した獄中記、そして日帝時代における各地域の刑務所に関する記録である。各巻の副題は「生と死の独白」、「その憤怒の記録」、「運命を懸けて立った意志」、「明日のための証言」、「黒い歴史の証人たち」として、全集に掲載された文章は歴史的記録／証言として規定されている。

る尹炳奭<sup>ユンビョンソク</sup>が監修者として参加した<sup>14</sup>。新聞の新刊評もまた、これを「愛国烈士、義士、志士たちが国内外で受けた過酷な刑罰や獄中での苦難の記録<sup>15</sup>」として紹介した。当時の出版社は、この回顧録が事実的な記録にのみとまらない「近代民族の受難を克服した韓国民の精神であり、文学<sup>16</sup>」と強調していた。すなわち、当時の獄中記は「事実的な記録」であり、「民族精神の文学」として認識されたのである。

ハンセム出版社もまた、同じ年の1977年に『(実録) 民族の抵抗1-5』を企画し、出版した。これもまた、編集者がそれぞれの獄中記を編集したものであるが、各巻のタイトルはそれぞれ「死の家の記録：獄中記選」、「独房：文学者投獄手記」、「侮辱の時代：学徒兵手記集」、「抗争の隊列：闘争日誌」、「憤怒の早瀬：日記と体験記」であり、「死、憤怒、闘争」の記録として照明しているという点において、前述の全集と大きく変わらない構成をとっている。

このように、解放30周年を記念して一定程度出版された日帝時代の獄中記は、『安重根義士自叙伝：安重根義士獄中執筆<sup>17</sup>』（1979）、『歴史に投げかける声—日帝治下愛国烈士、学徒兵、強制徴用者、女子挺身婦の手記<sup>18</sup>』（1980）などがあり、1985年にも解放40周年記念の出版物として、その後も出版され続けるようになる。1985年を前後して、「抗日闘争テーマの出版ラッシュ<sup>19</sup>」現象が起こり、その一環として日帝時代の獄中記が再び多

<sup>14</sup>『日帝下獄中回顧録 (일제하 옥중 회고록)』の編集者朴大熙<sup>パクテヒ</sup>と監修者尹炳奭は『写真で見る光復30年史 (사진으로 보는 광복 30년사)』でもともに仕事をし、光復30周年を整理する著述をしている。

<sup>15</sup>「옥중 회고록」『경향신문』1977. 2. 3.

<sup>16</sup>「감수의 말」『일제하 옥중 회고록 1』정음사, 1977, 7~8쪽.

<sup>17</sup>안중근 저, 이은상 역 『안중근의사 자서전 : 안중근의사 옥중집필』안중근 의사 숭모회, 1979.

<sup>18</sup>권영식, 송문영 공역 『역사에 던지는 목소리 : 일제치하에 국열사, 학병, 강제징용자, 여자정신부의 수기』동광, 1980.

<sup>19</sup>「항일투쟁 주체 출판 러시」『동아일보』1985. 3. 1.

く出版された。前述の『民族の抵抗1-5』全集を編纂した<sup>キムサンヒョン</sup>金相賢は、1985年には韓龍雲、金玟燮、<sup>チェスンマン</sup>崔承萬など12人の獄中記と手記を編集した『闇よ、たいまつよ (어둠이여 횃불이여)』(金相賢編、三民社、1985)を出版した。この本は、附録で<sup>イワンニョン</sup>李完用、<sup>シンテアク</sup>辛泰嶽など親日派のあゆみを記録した「民族正気の審判」を載せたが、「独立闘士の獄中記」と「親日派のあゆみ」を対比させて配置することによって、「民族的な抵抗における主体の記憶」としての獄中記の権威は強化された。つまり、1970年代の解放30周年を起点に「獄中記」というジャンル名は、「抗日民族の抵抗あるいは受難史」としての性格を固めることになり、これは1960年代から政治的な事件や民主化と統一問題をめぐって出版された獄中記の系譜と並んで共存するようになった。

## (2) 獄中記の正典化形成と社会的認識

これまで述べてきたように、韓国人の獄中記が出版され始めたのは、解放後になってからである。それと並行して、出版され読書されたのは翻訳された海外の獄中記であった。金玟燮の『私の獄中記』(1976)が出版される前までは、主にオスカー・ワイルド (Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde)、ルイーゼ・リンザー (Luise Rinser)、ネルー (Jawaharlal Nehru)、そしてローゼンバーグ (Rosenberg) 夫婦などの獄中記が翻訳・出版された。ローゼンバーグ夫婦の獄中記は、彼らが米ソ冷戦のスケープゴートとして日刊紙に掲載されて注目を受け、ルイーゼ・リンザーも作家の北朝鮮訪問と、その獄中記の翻訳家が<sup>チョンヘリン</sup>田惠麟であるという事実のためにイシュー化された。このうち、作家の獄中記として文壇で注目を浴びたのは、オスカー・ワイルドの『獄中記』とルイーゼ・リンザーの『獄中日記』(田惠麟訳、乙酉文化社、1974/1981)である。

最も多く翻訳された獄中記は、オスカー・ワイルドのもので、1950年代から1970年代までに4人の翻訳家によって翻訳され続けた。当時、オスカー・ワイルド『獄中記』が翻訳された出版目録は次の通りである。

表1 オスカー・ワイルド『獄中記』の翻訳出版目録

	出版年度	書名	翻訳者	出版社
1	①1958 ②1958、1959、1962 ③1959	獄中記	カンソンイル 姜誠一	①オリ文化社 ②中央教育出版社 ③白竹文化社
2	①1959 ②1980	獄中記	チョソンチュル 趙誠出	①汎洋出版社 ②大興
3	①1976、1995、2004、2008、2010	獄中記	イムホニョン 任軒永	①汎友社
4	①1977 ②1982	獄中記	イサンドゥ 李相斗	①東西文化社 ②門松社

オスカー・ワイルドの『獄中記』はその後も翻訳され続け、1950年代から2010年代まで、さまざまな出版社と翻訳家を通して10回以上出版されたが、これはほかの獄中記に比べ、圧倒的な回数である。1970年代までの翻訳家は、姜誠一、任軒永、李相斗などであるが、彼らの活動とともに調べてみると、獄中記の読書が執筆と翻訳活動によってつながること、そして投獄経験と獄中記出版の作業との関係などを確認することができる。

最初の韓国語翻訳本は、1958年の姜誠一による翻訳本である。この版本は、初版出版の際、「香り高い四つの色と不断の真実にぶつかろうとする姿勢にもとづき、孤独で絶望な人びとの友として、広く愛読されて」きた「名作」として注目を浴びた<sup>20</sup>。新刊を紹介する記事のなかには、オスカー・ワイルドを耽美主義者として紹介しており、彼の獄中記を「人間が自らを脱皮し、より高いレベルに至る新生の記録」と評価し、「識字層の一読に値」とすると、この翻訳本を翻訳者による積極的な宣伝によって、知識人のみならず、女性、大衆にも読書されるようになった。この本は、1962年に再版された際にも再び注目を浴び<sup>21</sup>、以後、翻訳者の姜誠一は、

<sup>20</sup>「와일드작・姜誠一譯『獄中記』」『동아일보』1958. 9. 13.

<sup>21</sup>「신간소개」『동아일보』1962. 10. 29.

1963年ソウル市が主催した女性教養講座、市立婦女事業館において開催された読書クラブの集まりで、「オスカー・ワイルドの獄中記について」を数回講演するなど<sup>22</sup>、市民講演を活発に行った。

3人目の翻訳者である任軒永は、自身が雑誌『タリ (타리)』の主幹を務めた1963年には、獄中記シリーズの連載を企画した。その第1回の文章がまさに金玼燮の獄中記「思想犯」であった。そして任軒永は、金玼燮の『私の獄中記』が発行された1976年にオスカー・ワイルドの『獄中記』を翻訳、出版した。当時翻訳家は、オスカー・ワイルドを「すべての既存秩序と時代遅れの権威意識、そして価値観を拒否し、新しい世界を探すために闘ったが、世界の人々に批難と虐待を受け、受難のなかで不幸にも死んでいかざるを得なかった天才<sup>23</sup>」と、そして彼の獄中記を「獄中記文学の金字塔」として紹介した。任軒永の獄中記翻訳もまた、彼の2回の投獄（1974年と1979年）のあいだに行われた。

4人目の翻訳者の李相斗は、1977年オスカー・ワイルドの『獄中記』を翻訳する前に、本人の投獄経験をもとに『(鐵鎖の共和国) 獄窓越しの青い空 ((자물쇠 共和國) 獄窓너머 푸른 하늘이)』(汎友社、1972)を執筆、出版した。このように、彼ら獄中記の翻訳者たちはほとんど投獄の経験があり、獄中記の創作と翻訳、連載など、獄中記というジャンルそのものに積極的に関与した。

オスカー・ワイルド『獄中記』の翻訳ブームは、韓国におけるオスカー・ワイルドの認知度を背景に起こったものである。日本では1910年代にすでに日本語訳が出版されており<sup>24</sup>、1920年代には『ワイルド全集』5巻が完

---

<sup>22</sup> 「여성교양강좌」『동아일보』1963. 1. 15. 「독서클럽모임」『동아일보』1963. 3. 7.

<sup>23</sup> 오스카 와일드 저, 임현영 역 『옥중기』 범우사, 1976, 7쪽.

<sup>24</sup> 오스카·ワイルド著、辻潤訳『ド・プロフォンデイス：一名・獄中記』（世界名著文庫第3編）越山堂、1919年。

訳された。植民地朝鮮では、オスカー・ワイルドは1910年代半ばから紹介され、1920年代の各種新聞・雑誌において「幸せな王子」のような童話を中心に、頻繁に言及されており<sup>25</sup>、1921年には『サロメ (살로메)』(梁在明訳、<sup>ヤンジェミョン</sup> 博文書館)が翻訳されたりもした。<sup>キムドンイン</sup> 金東仁、<sup>パクヨンヒ</sup> 朴永熙、<sup>イヒヨソク</sup> 李孝石、<sup>ヨムサンソプ</sup> 廉想渉など、さまざまな作家によっても読書、紹介された<sup>26</sup>。彼は「アイルランド出身」の「退廃的な唯美主義作家<sup>27</sup>」であり、「ヒューマニスト作家」として紹介されたが、植民地朝鮮の作家にとって、アイルランド出身作家は格別な意味があった<sup>28</sup>。当時、早稲田大学英文科で勉強していた金玗燮は、アイルランド作家に関心を見せており、以後、<sup>チカンヒヨクチュ</sup> 張赫宙とともに翻訳した『世界傑作童話集』(朝光社、1936)では「アイルランド編」を担当したりもした<sup>29</sup>。オスカー・ワイルドの直接的な投獄原因がアイルランドの独立運動とは無関係な同性愛事件であったのにもかかわらず、彼のデカダンス的な性向は、当時のアナーキズムや社会主義の立場に類似して、脱体制的であり、抵抗的な脈絡において読み取ることができる。彼の獄中記は、「抑圧を受ける階層の苦痛に対する同情」と「芸術家の自律性」を盛り込んだものとして漠然と理解されたものと思われる。廉想渉が3.1運動を想起するために、大阪の天王寺公園に向かう時にオスカー・ワイルドの「獄中記」を胸に忍ばせた<sup>30</sup>というハプニングは、このような受容のなかで起きたも

<sup>25</sup> 「幸せな王子」の翻訳本「王子とツバメ (왕자와 제비)」は、<sup>반ジョンファン</sup> 方定煥の代表的な翻訳童話集『사랑의 선물 (愛のプレゼント)』(開關社、1922)に掲載された。

<sup>26</sup> 이보영 「Oscar Wilde 문학의 수용과 그 한국적 변용」『세계문학비교연구』1, 1996. 4, 144 ~146쪽.

<sup>27</sup> 오스카·와일드가唯美主義として受容された韓国の場合に関しては、전혜자 「유미주의」(김학동 외 『한국문학사조론』 새문사, 1995)을 参照。

<sup>28</sup> 한형구 「한국 탐미주의 비평의 한 사례 -1930년대 후반 김문집 비평의 문단 위상과 그 미적 이론의 형성 배경」『어문론집』47, 2011. 7, 360쪽.

<sup>29</sup> 엄희경 「일제 강점기 번역 변안 동화 앤솔러지의 탄생과 번역의 상상력(1)」『문학교육학』39, 2012. 12, 239쪽.

<sup>30</sup> 이보영, 前掲論文、156頁。

のとしてみるができる。

そして、当時の作家たちにはオスカー・ワイルドの『獄中記』に比肩する獄中記録を書いて欲しいという依頼がたびたび往来したものと思われ、このテキストは文学的な獄中記の代名詞として認識されたものと思われる。1938年『東亜日報』の「文友春秋」紙面には、「獄中花」というタイトルの下に『春香伝』とオスカー・ワイルドの『獄中記』を比較する文章が載せられるが、当時作家が必読を推薦するオスカー・ワイルドの版本は、1929年に出版された改造文庫の日本語からの翻訳本だった<sup>31</sup>。この版本は、同じ年に60版以上印刷されており<sup>32</sup>、爆発的に売れ、朝鮮でもこの版本が言及されたものと思われ、朝鮮の作家たちもまた改造文庫の本を読んでいた可能性が高い。また1939年に梨花女子専門学校の文科課長であった金尚<sup>イフア</sup>鎔<sup>キムサン</sup>は、ある新聞社との電話インタビューにおいて「いま何をしているのか」という質問にオスカー・ワイルドの『獄中記』を読書中であったという回答をしているが<sup>33</sup>、このような人びとのみならず、教育に従事する人たちのような、ほかの知識人階層にも読まれたものと思われる。

このように、金玗燮の『私の獄中記』(1976)は、オスカー・ワイルドのような芸術家の獄中記がたびたび翻訳、出版され、それが名作として認められながら、韓国人の獄中記が「商業的なベストセラー物」と「政治思想犯の獄中記」、そして「抗日獄中記」として表象される主流のなかで出版された。しかし、彼の獄中記が出版された年に、ほかの知識人が獄中記の執筆依頼を固辞して残した所感のなかには、「獄中記を書くということ」に対する知識人あるいは作家たちの感覚を断片的に示しているものがある。作家であり、ジャーナリスト、教育者であった李<sup>イ</sup>炳<sup>ビョン</sup>注<sup>ジュ</sup>は「たいした人物

<sup>31</sup> オスカー・ワイルド著、神近市子訳『獄中記』（改造文庫；第2部 第47篇）改造社、1929年。

<sup>32</sup> 日本国会図書館の所蔵本に基づき推定した。

<sup>33</sup> 「전화문답기」『동아일보』1939. 5. 12.

でもない人間の獄中記がそのまま読者に読まれる理由はないと考え」て、自分自身の獄中体験を「小説で作り上げた」と明らかにした<sup>34</sup>。彼は獄中記を社会的な認知度が高い人物が出版するのに値する出版物として分類しているが、謙讓のジェスチャーをとり、その経験をフィクション化した。反面、キムソウン金素雲は「オスカー・ワイルドを凌駕する獄中記の一つを」書いてほしいという依頼を受けた時、李炳注とは異なる理由で断っている<sup>35</sup>。彼は、獄中記とは結局「誰かを恨みも傷つけも」でき、「私自身を弁疎する文章」になりかねないことを予感して、非難と弁明の文章を固辞することで、「苦痛を人に見せないという私自身との約束」を守ろうとしたと述懐する。こうした記述の底辺にある意識的、無意識的な層を勘案しなければならないのだろうが、一方でこうした物言い自体、当時の知識人らが獄中記の読者としてではなく、筆者として抱いていた心情的な居心地の悪さを表わしている。

### 3. 「自伝文集」の構成と効果

#### (1) 日記という私的な記述の公的な共有過程

獄中の日記が出版されるためには、さまざまな条件がそろわなければならない。すべての人々の日記や手紙が保存、出版、読書されはしないように、獄中の日記・手紙もまたそうである。金珖燮が獄中日記を残した日帝時代の場合、収監者が記録を残そうとすれば、とにかく生存しなければならなかった。そして学問と知識のある者でありながら、模範囚として収監者等級3級以上に昇進し、かつ、ペンと紙を持つことを許されなければならず、これを紛失や押収されないよう保管しなければならなかった。このよ

<sup>34</sup> 「실격교사서 작가까지」『동아일보』1976. 8. 14.

<sup>35</sup> 「그때 그 일들 115, 김소운, 나 자신과의 약속」『동아일보』1976. 5. 20.



うに残された獄中記録物のなかでも限られたものが残されるようになり<sup>36</sup>、それができない場合は、出獄後に回顧録として残されるようになる。さらに、出獄や解放後、それが出版されるのに値する政治的な力学関係、あるいは社会的な必要性をクリアしなければならなかった。したがって、獄中の手紙や日記の単行本出版は、これらすべての条件が符合され、社会に突如起こった一つの事件であると同時に、またこれは特定の個人の私生活が公的に共有される必要や価値を認められ、「公人」としての内面叙事を獲得するようになる過程にもなる。近代以降、西洋・東洋問わず、日記の主体が女性と少女、青少年である場合が多いのにもかかわらず、出版される日記は男性エリートのもものがほとんどであるという事実<sup>37</sup>は、日記の出版が社会的な「認定闘争」と緊密な関係にあることを示唆している。

獄中記は手紙や日記を集めた場合が多く、その他の自叙伝より代筆の可能性が低い、筆者、編集者、遺族による加筆あるいは削除された可能性は排除することができないものである。そして、当初の執筆段階から検閲と監視の主体である他人に読まれることを意識したまま作成されたテキストである。すなわち獄中記とは、監獄という外部検閲とこれを内面化した自己検閲という二重の検閲のなかで作成された産物なのである。

金玼燮の『私の獄中記』は、獄中記がその初期段階から置かれた複雑な内外部の条件と、解放後に知識人が植民地の記録を再生産するようになる経路をめぐる問題を喚起させる。この単行本の初稿は、彼が1941年2月21日に治安維持法違反で逮捕されて投獄した1942年9月1日から1944年9月2日までのあいだの、1943年11月10日から1944年9月5日<sup>38</sup>に記録された日本語による日記である。金玼燮は解放後、1961年にこれを韓国語に翻訳し、自

---

<sup>36</sup> 現存する獄中の手紙は、投獄者数に比べて少ない方である（장세봉 「어느 혁명운동가의 옥중편지」 『한국근현대사연구』 52, 2010. 3, 226쪽）。

<sup>37</sup> Philippe Lejeune, op.cit., p.7.

<sup>38</sup> 『국가기록원 일제문서해제 -행형편-』 기록정보서비스부 기록편찬문화과, 2012.

身が運営した雑誌『自由文学』に全13回連載した<sup>39</sup>。まさに、三つの版本のあいだに翻訳と修正が行われたのである。

彼は当初から看守の検閲を意識して、言語を選び、雑文のように日記を書いており、したがって解放後にこれを雑誌に掲載する際には、ただ翻訳のみをしたのではなく、「略記したこと、隠喩と反語で書いたこと、あれこれ暗示したことなどを直すこと」に数か月を要さなければならなかったと明らかにしている<sup>40</sup>。彼は、獄中で日記を書いた当時、「日記」ともできず、ただ「落書きとして」「獄中身辺雑記であるのみ」と雑文であると標ぼうするしかなかったが、1961年には彼自身の雑文が「倭政〔日本植民地統治〕下における独立運動家」の「片鱗」をこの「土地に生きる兄弟と刑務行政者に」見せられることを期待した。私的な雑文に、日帝時代における民族闘争の悲惨な現場に対する価値のある証言としての意義を付与し、史的な記録の公的な証言性を浮き彫りにさせているのである。「自伝文集」として出版された金琠燮の獄中日記のこのようなポーズは、自伝叙事 (personal autobiography) が植民地あるいは投獄体験を記録する際に、公的な証言 (public testament) に変換される場面をよく表している<sup>41</sup>。

そして1961年に翻訳・修正された獄中日記は、1976年に出版された際、再度推敲が行われる。当時の編集者である白樂喲<sup>ベクナクチョン</sup>は、これまで発表された金琠燮の原稿が「単行本を作るために特別に改作されたものではないが、雑誌に発表されて以来、著者が時間をみつけては校正あるいは修正を加えておいたものを今回掲載した」ことを、「編集後記」を通じて明らかにした<sup>42</sup>。この創批本の校正を担当した廉武雄<sup>ヨムムウン</sup>は、当時彼自身が作家から受けとって校正をほどこした原稿と、遺族が保管している肉筆原稿とのあいだ

<sup>39</sup> 김광섭 「나의 옥창일기」 (13회) 『자유문학』 49~61, 1661~1962.

<sup>40</sup> 김광섭 「머리말 1」 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976, 12쪽.

<sup>41</sup> Doran Larson, "Toward a Prison Poetics", *College Literature*, 37(3), 2010, p.145.

<sup>42</sup> 김광섭 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976.

に相当な差があることを、最近になって知ったと述懐した<sup>43</sup>。このように、筆者、編集者、校正者の3人すべてが版本の改変を認めている。

日帝時代の思想犯から、20年後の4.19革命直後の知識人として、そして再び15年後の『城北洞の鳩』の詩人となった金珖燮のあゆみを考慮すれば、自伝的な文章の変化は、自然な現象である。もちろん、初稿をそのままにせず、継続して推敲することは多くの筆者の普遍的な性向であり、誠実性の指標でもあるため、出版時期別における版本の変化そのものについてはおかしいことではない。その上、金珖燮の日記の場合は1944年の初稿を確認することはできないが、以後出版された版本にも、彼に付着した「抗日」のしるしが疑わしく思われるほどに模範囚として順応する態度が記録された内容を含んでいるため<sup>44</sup>、解放後、隠蔽のような脚色が起きたと見られるようなこともない。また、1961年版と1976年版の違いは主に削除や内容改変ではなく、補足説明が加わる程度であり、意図的な歪曲だと批判するほどの点が大きくあるわけでもない。したがって、『私の獄中記』の場合は日記自体の版本の比較よりも、日記を異なる様式、つまり回想記や病床記と結び付けるやり方を通じて、統合的なアイデンティティーを形成するようになったという点に着目することが、より生産的な議論を引き出すことができるだろう。

東アジアにおける近代の日記の歴史を見れば、日本のケースが目立っているが、この場合、近代国民の育成の一環として日記をつづることの生活化が勧められたのであって<sup>45</sup>、植民地における朝鮮人もまた、そのような

---

<sup>43</sup> 엄무웅, 前掲論文, 43頁。

<sup>44</sup> 장신 「일제하 형무소의 사상범 대책과 전향자 처우 -김광섭의 「獄窓日記」를 중심으로-」 『민족문화연구』 63, 2014. 8.

<sup>45</sup> 日本の日記出版および普及の歴史と朝鮮の場合についての対比は、次の論文で整理されている。정병욱 「식민지 농촌 청년과 제일조선인 사회」 정병욱・이타가키 류타 편 『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』 소명출판, 2013, 271~276쪽.

制度的な慣習の影響のなかに置かれていたとみることができる。ところが、日帝時代の刑務所で模範囚であった金珽燮が書いた日本語による日記が、解放後、韓国語に翻訳され、個人のことではなく、「民族の受難記になぞらえる良い文章<sup>46</sup>」として出版・読書された歴史は、日記の逸脱的な読み方の可能性を示している<sup>47</sup>。つまり「日記」の「書くこと」と、「出版」、「読むこと」は区別する必要がある、これらの併置を通じて、社会的なテキストとして日記を読解できるようになる。

金珽燮の獄中記が掲載された雑誌『自由文学』だけでも、「太平洋日記」（連載途中「監獄の季節」にタイトル変更）や「カフカの日記」（連載途中「審判の季節」にタイトル変更）などの日記が連載されるなど、日記の共有は特別なことではなかった。近代の日記は、「私生活」と「内面」という近代的な概念と結びつけられ、秘密の文書として認識されたが、他人の日記はいつも読書の欲望を刺激しており、近代商業出版システムのなかで日記の商品価値を高めた。したがって、近代の日記は内密なことを盛り込むことができる様式として認識されたが、同時に不特定多数の人びとに読まれる可能性を念頭に置いて書かれざるを得なかった。

近代における日記の出版市場は、日記の執筆者によって「公開」を意識した「私」を記述するようになる側面がある。そうならば、金珽燮は日記に関するいかなる概念と感覚のなかで自らの日記を書いたのだろうか？彼は日記を執筆した当時、ウクライナ出身の女流画家であるマリ・バシキルツェフ（Marie Bashkirtseff（1860～1884））の日記を読んでいた。この本は当時、朝鮮語翻訳本がなかったため、彼は、日本の国民文庫刊行会の「世界名作大観」シリーズのうちの一つで1926年に出版された日本語翻訳本を読んだ

<sup>46</sup> 「못 벗어난 안이성, 7월의 문학잡지」『동아일보』1961. 7. 10.

<sup>47</sup> 近代国民国家の育成のため、近代日本における日記をつづる制度、商品化、そしてその忠実な記録である日記の逸脱的な読み方の可能性に関しては、니시카와 유코「근대에 일기를 쓴다는 것의 의미」（정병욱・이타가키 류타, 前掲書, 46～64頁）を参照。

ものと思われる<sup>48</sup>。そして、彼の獄中日記によく登場するミシェル・ド・モンテーニュ (Michel de Montaigne (1533~1592)) の『随想集』もまた、この「世界名作大観」シリーズの一つであったので<sup>49</sup>、このシリーズの下で出版されたオスカー・ワイルドの『獄中記』もまた読まれた可能性が高い<sup>50</sup>。

そして、彼が自分自身の日記に引用したりもした<sup>51</sup>「マリ・バシュキルツェフ」の日記は、彼の日記に関する態度に影響を与えた可能性もある。マリ・バシュキルツェフは、自身の日記が家族に読まれた後に燃やされたり、後世に当時の女性の生涯に関する資料として興味を集めることができるという点を認知したまま、日記を執筆していた<sup>52</sup>。これに彼女は、自身の日記がその後公的に出版される可能性を予想して、ルソーの『告白録』における導入部分と類似した序論を残す。ここで彼女は、自分の死後、所有物が焼却されて存在が忘却され、無(「nothing」)になってしまうという恐怖から自分を守り、日記を残すと明らかにした。

こうしたマリ・バシュキルツェフの日記を読書の糧にした金斑變は、一寸先も見通せない植民地期ではあったが、自身の日記が公刊され得ることを意識せざるを得なかったのである。

---

<sup>48</sup> Marie Bashkirtseff 著、野上豊一郎訳『マリ・バシュキルツェフの日記』上・下巻(世界名作大観 各国篇 第15・16巻) 国民文庫刊行会、1926・1928年。

<sup>49</sup> Michel de Montaigne 著、高橋五郎・栗原古城訳『モンテーヌ随筆集』上・下巻(世界名作大観 各国篇 第12・13巻) 国民文庫刊行会、1928年。

<sup>50</sup> ワイルド著、平田禿木訳『ドリアン・グレエの画：附・獄中より』(世界名作大観 英国篇 第7巻) 国民文庫刊行会、1925年。もちろん、これがオスカー・ワイルド『獄中記』の最初の日本語による翻訳本ではない。オスカー・ワイルドの専門家として『英国近世耽美主義研究』という博士学位論文を書いた本間久雄による翻訳本が存在した(オスカー・ワイルド (Wilde Oscar) 著、本間久雄訳『獄中記』新潮社、1912年)。

<sup>51</sup> 金斑變の1943年12月19日付の日記には「マリーの日記には3人の愛人がいるが、私の日記にはただひとりの愛人もいない」などといった読書の感想が記録されている(김광섭 『나의 육공기』 창작과 비평사, 1976, 57쪽)。

<sup>52</sup> Philippe Lejeune, op.cit., p.140.

## (2) 日記と回想記のちがい

日記は、自叙伝とは違って、完結された自我像を志向して記述する叙事を備えていない。また、読者を念頭に置いた強力な修辭も積極的に動員されない。それにもかかわらず、雑多な日常の記録である日記は、反復的な再現を通じてあるかたちのイメージを具現化する。金班變の「獄窓日記」には、刑務所で「23番」と呼ばれ、機械化されていって、動物と化していく「本能的な自己」や知識人としての人間の尊厳を守ろうとする「理性的な自己」とのあいだの張り詰めた緊張が率直に記録されている。「自己統制の熱望」と「良心的な省察」<sup>53</sup>という日記ジャンルの普遍的な動機がこの「獄窓日記」にも作動しているのである。この時、自分が動物化されることを感じる兆候は、「我慢できない飢え」、つまり食欲であり、自らを人間化できる唯一の行為は「読書」である。日記のなかの金班變は、犬のように伏せて食べても、看守の視線を感じたら早く身を起こして腰を垂直展開して「毛布を敷いておとなしく本を」(94<sup>54</sup>) 展開する「人間」としての姿を示し、自尊心を回復する(49)。彼は毎日機械のように労働し、毎日あふれている死体を運んで仮埋葬しては、その場しのぎで食べ物をとって、何くわぬ顔で座って本を読む。彼の日記は繰り返される刑務所の日常の中で動物化される自分に対する苦悩と、それにもかかわらず、読書と執筆を通じて、人間らしさを維持しようとする意志の記録である。

彼の「獄窓日記」が、1943～1944年における現場の記録として日常生活を置いていたならば、「思想犯」は1941～1942年の経験に関する事後的な記録として、特定の事件に関する記憶を付記する。日記が求心点のない、思弁的な記録を集めたものになりがちである反面、回想記は叙事としての

<sup>53</sup> 이사벨 리히터 「자기를 쓰다 -18세기와 19세기 독일어권 일기에 드러난 경험, 주체성 그리고 개인성에 대하여-」 정병욱・이타카키 류타, 前掲書, 110頁。

<sup>54</sup> 以下、括弧の数字は金班變の『私の獄中記』からの引用頁を示す。

完結性を念頭に置いて、記憶の取捨選択によって記述された、単一のプロットの回想記であることから、均一な自我像を見せてくれる<sup>55</sup>。回想記「思想犯」は、「獄中記シリーズ」を企画した雑誌『タリ』の1回連載物で、1972年に掲載された。『タリ』は「〔雑誌〕思想界の廃刊以降、言論暢達と社会正義に貢献しようとする新たな覚悟で発行<sup>56</sup>」したと、創刊目的を明らかにした雑誌である。「獄中記シリーズ」は、投獄時期が日帝時代と解放後にそれぞれ異なる6人の「金玼燮、梁秀庭、李相斗、宋志英、徐珉濠、<sup>キムチヨル</sup>金哲」の獄中記を連載した<sup>57</sup>。このような「獄中記シリーズ」は、『タリ』が1971～1972年のあいだに企画、連載した「近代人物評伝」－「20世紀における問題」シリーズとともに、組織と行動に対する政治的な立場を表明した企画として評価されている<sup>58</sup>。このうち、金玼燮と梁秀庭、徐珉濠、李相斗の獄中記は、連載前後の時期に単行本として出版されたりもした。

現場と回想という時間的なギャップは、回想記や「獄中記」に「ユーモアやウィット」が突然入り込む余地を準備する。金玼燮は、赤い囚人服を着て、刑務所の塀を歩いて入っていき、拷問道具とぶつからざるを得ない瞬間を思い出しながら、当時の自分を〈不思議の国のアリス〉と呼んだ<sup>59</sup>。現場の記録である日記では、自分自身を刑務所の物理的な番号である「23番」と呼ばれた彼は、回顧を通じて「不思議の国のアリス」といった文学的な修飾語に代替するだけの余裕を確保したのである。

<sup>55</sup> フィリップ・ルジュヌヌ (Philippe Lejeune) もまた、日記や自叙伝と対比される自叙伝の特性として、過去を回想することとつなげられるナラティブを構築することを挙げた。

<sup>56</sup> 좌담 (이호철 외) 「지성은 살아있나?」 『다리』 1971. 5-6, 9쪽.

<sup>57</sup> 김광섭 「옥중기시리즈① 사상범」 『다리』 1972. 4-5 ; 양수정 「옥중기시리즈② 옥창살을 쥐어잡고」 『다리』 1972. 6 ; 이상두 「옥중기시리즈③ 역사의 단애에서」 『다리』 1972. 7 ; 송지형 「옥중기시리즈④ 나의 수인기」 『다리』 1972. 8 ; 서민호 「옥중기시리즈⑤ 신념에 살게 한 반세기의 시동」 『다리』 1972. 9 ; 김철 「옥중기시리즈⑥ 수난의 계절」 『다리』 1972. 10.

<sup>58</sup> 박대현 「『다리』誌의 현실참여와 행동주의의 의미」 『한국문화이론과 비평』 17(3), 2013. 9.

<sup>59</sup> 김광섭 「나는 일본 식민지의 앨리스였다.」 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976, 216쪽.

彼は回想記を通じて、投獄中だった「自己」と「世界」の性格、そして投獄という事件の社会的な意味を意識的に見渡すことのできる時空間的な距離を獲得するようになり、以前の獄窓日記では盛り込めなかった叙事を付け加えられるようになる。獄中の回想記「思想犯」は「獄窓日記」とは異なり、思想犯となった事件の顛末、抗日と反共の内容を全面的に扱いつつ、植民地の個人的な記録を社会的に脈絡化し、植民地の記憶を再構する距離感を確保する。

「思想犯」は、日帝時代の監獄という時空間のなかに置かれた金玼燮自身が投獄された事実を喚起させるアイデンティティーを2筋のスペクトルに分散させる。まず、彼は獄窓日記には記述できなかった2人の人物を露出させる。それはまさに「本当の独立軍」である「ヒョン」と「共産主義者」である「キムテジュン金台俊」である。金玼燮は自分自身と区別される「本当の独立軍」である「ヒョン」とは一時的にでも併合をし、金台俊とは壁をつくり、となりの部屋にいた。ある日の夜、金玼燮のとなりの部屋には金台俊が収監されるようになり、二つの独房の収監者たちはそのおかげで退屈しない時間を過ごすことになる。

京城帝国大学の教授であった金台俊は「知識人」という理由で監獄の中では珍しい存在だった。「まるで新しい動物でも入ってきたように、その門の前に観光客が止まることがなく」、彼を知っているという理由で金玼燮自身の人気も上昇するようになる。しかし、金玼燮はこう付け加えている。「いつも私は緊張した。彼は共産主義者だったからだ」と<sup>60</sup>。それもそのはずで、金台俊は、思想や主張をほかの人に広く知らせないことが常識となっている収監者たちの常識をやぶって、「大胆に共産主義を私に勧め」たのだった。この出来事は、彼が「日帝時代に北向きの監房で4年を過ごした苦難の詩人でありながら、となりの部屋の左翼・金台俊の熱心

---

<sup>60</sup> 김광섭 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976, 212~213쪽.



な社会主義の誘いも断った人物<sup>61</sup>」として記憶されるようになる文書的な証拠となった。

そしてこのエピソードにはさまざまな反共性が付随する。例えば、金玼燮は早稲田大学留学当時、社会主義的な雑誌である『卵(알)』の同人を務めていた。社会主義の性格を帯びてはいたが、当時の文学的な主流は社会主義的リアリズムであり、『卵』もそれを反映したものにすぎなかったという。また「6.25〔朝鮮戦争〕の時、父親が大統領秘書の父であるという罪名で、共産軍に殺害された」という家族史も明らかにしている。これらは1976年に単行本として編集して追加した「追記」の内容である。

こうして出版された1976年の『私の獄中記』は、「抗日の日記」が「反共の回想記」と結びつけられ、70年代の詩人／知識人の社会的な座標を形成したのである。

#### 4. 自己叙事の「出版」と社会的アイデンティティー

##### (1) 「抗日」と「反共」の記録と社会的な期待

1970年代、金玼燮の知人らが彼を説明するキーワードは二つ、「日帝時代における投獄」と「城北洞の鳩」だった。詩人金奎東<sup>キムギョドン</sup>は当時「金玼燮」という詩を残しているが、この詩は「日政〔日本植民地統治〕時の監獄」を耐えてきた詩人として、彼を形象化するところからはじまり、「城北洞の鳩」に言及するところで終わる。ところが、彼の全体的な行動を見ると、この二つのキーワードは氷山の一角にすぎない。一人の長くも長い人生行路と、多面的な実体のなかで、社会的要求と符合する一部の地点が水面上に浮かび上がるようになるのである。

---

<sup>61</sup> 고은 「나의 산하, 나의 삶 143」 『경향신문』 1995. 3. 5.

そのような点において「金玟燮、詩人という記憶の隅の文壇建設者<sup>62</sup>」というタイトルは、金玟燮に対するさまざまな評価のあいだの亀裂をよく表している適切な表現である。金玟燮と彼の詩に対する研究や評論は、「詩人金玟燮」の詩の世界に対する積極的な解釈や「右翼文壇の権力者」としての生き方に対する記録という二つの評価に分かれていた。ところが、彼の人生はこの2点が緊密に結ばれており、特に晩年の『城北洞の鳩』と『私の獄中記』は、韓国文学史において複雑な彼の存在と評価について解き明かす鍵となり得るものである。

まず、彼の社会人としての履歴、文壇における実績をまとめてみると次のとおりである。1905年咸鏡<sup>ハムギョンフクト</sup>北道で生まれた金玟燮は、間島〔旧満洲、現中国東北部〕で幼少時代を過ごし、京城中学校〔現在のソウル高等学校〕を経て、早稲田大学<sup>イホンダ チョンインソブ</sup>で李軒求、鄭寅燮などと親交を深め、イギリス文学を専攻した。1933年から母校の中等学校で英語教師として勤務し、1939年には金鉞山事業を展開した。1942年には「学生たちに民族思想を鼓吹した容疑で」、1944年まで獄中生活を過ごした。解放後、彼は米軍政庁公報局長、李承晩大統領の初代公報秘書官（1948）などの官職を経て、1952年に慶熙<sup>キョンヒ</sup>大学校教授となり、国際ペンクラブ韓国本部中央委員（1954）、韓国自由文学者協会委員長（1955）、全国文化団体総連合会常任最高委員（1959）、芸術院推薦委員（1960）などを歴任する。彼は『民衆日報』編集局長（1947）、雑誌『自由文学』発行人（1956）、『世界日報』社長（1958）を務め、言論出版界の役職も歴任した。そして、ソウル市文化賞（1957）、大韓民国文化芸術賞（1969）、国民勳章牡丹賞（1970）、芸術院賞（1974）など、解放後における各種の政府勳章も授与されている。

---

<sup>62</sup> 홍정선 「김광섭, 시인이란 기억 뒤의 문단 건설자」 『한국사 시민강좌』 43, 2008. 8, 336 ~ 347쪽. 洪廷善は2005年、文学と知性社を通じて『怡山 金玟燮詩選集（이산 김광섭 시전집）』を出版した。

金玼燮自身の回顧によると、彼の出世作は、朴龍喆<sup>パクヨンチョル</sup>が高く評価し、文壇で注目を浴びるようになった詩「孤独」(『詩苑』1935.4.)である。それから3年後、処女詩集『憧憬』(1938)を出版した以外には、あまり活発な文壇活動をしたとは思えない金玼燮が、解放直後、韓国初代大統領の広報官の役割を担いつつ、文壇に勢力を及ぼす主要な官職を歴任するようになった。解放後における彼のあゆみは、いわゆる右翼文学団体の推移のなかで見ることがあるだろう<sup>63</sup>。解放直後、左翼文学団体の組織力に刺激され、1945年に金玼燮、李軒求などが中心勢力になって急造した右翼文学団体は、「過去の海外文学派の一部の会員を中心とした会員数10人余りの一介のクラブにすぎなかつた」<sup>64</sup>。

この小さな団体は翌年、李承晩、金九、米軍庁官などの政財界関係者の支持のなかで全国朝鮮文筆家協会(以下、全文協)に発展する。この全文協の結成大会で金玼燮の結成趣旨書が採択されて、彼は、尹潑善<sup>ユンボソン</sup>が社長、李軒求が主筆を務めていた『民衆日報』の編集長を務めることになる。金玼燮が大統領秘書官を務めていた時、李軒求は公報処次長であった。そして朝鮮戦争が勃発すると、文総救国隊〔朝鮮戦争当時、全国文化団体総連合会で結成された従軍慰問団〕が結成され、金玼燮がその代表を務める。彼が解放直後、政界と文壇権力において覇権を握ることができるようになった力はどこにあったのか?解放空間から大韓民国政府樹立期にかけて、「抗日」と「反共」という旗じるしは、勲章に他ならなかったが、金玼燮はその証拠を持っていた。

まず、「抗日」の場合を見ると、解放空間では、親日の嫌疑から完全に自由な作家は左右を問わず珍しかった。ところが金玼燮は、多くの作家た

<sup>63</sup> 解放期における文学空間の政治性については、신형기『해방 직후의 문학운동론』(화다, 1988)、김영민『한국현대문학비평사』(소명출판, 2000)で整理されている。

<sup>64</sup> 解放後、いわゆる右翼に分類される保守文人組織の歴史に関しては、次の論文で詳述されている。김철「한국보수우익 문예조직의 형성과 전개」『실천문학』18, 1990.6, 16~41쪽.

ちが朝鮮総督府や総力戦に動員され、いわゆる「親日」の「汚点」を残すようになる、日帝末期の1941～1944年の間に刑務所に収監されて、政治思想犯としての投獄の記録だけを残し、これが「抗日」の決定的な証拠となった。解放空間における文壇において、日帝時代の投獄は「創作活動よりはるかに輝く履歴」だったのである<sup>65</sup>。「日帝に対する抵抗」という表象は、思想的系譜とは関係なく、「民族」の英雄として浮かび上がるようになる経歴にもなった。

しかし、彼は自分が本当の意味での「抗日独立運動家」ではなかったという事実を明白に明らかにしていた。彼は教師として授業時間に不適切な発言をし、不純な詩を発表して治安維持法を違反したという理由で逮捕された。刑務所で彼は「本当の独立軍」、満洲の独立運動家たちに出会っている。

独立運動というのを新聞でたくさん見たが、中学校も卒業できなかった若者たちが満洲の原野で自分の体や家族をかえりみず、爆弾を抱えて日本国に飛び込んだのはこの人たちだったのかと、目頭が熱くなった。私のような短期刑としては残期がどれくらい残っているのかということを探ねることさえためらった。(中略) 私は当時、私たちが想像さえできなかった本当の独立軍がここにこんなにいるとは！何を信じて自らの青春と情熱と家族を捨てて、はるか遠い独立のために爆弾を背負ったのだろうか？

(「思想犯」217)

『私の獄中記』のなかで、彼は厳密に言えば「本当の独立軍」ではなかった自分自身の内面を告白したが、社会は依然として彼に「抗日」のしるしをつけた。「監獄」それ自体が「抗日」を、「監房」の壁はとなりの部屋の「共

---

<sup>65</sup> 홍정선, 前掲論文, 337頁。

産主義」を拒否した「反共」の象徴として、読者に読解されたのであった。

ところが1960年に4.19革命が起き、抗日と反共だけでは踏みとどまれない時代が来てしまった。金玼燮は、文壇の次の世代を主導することになる若い血気のなかでは「謹慎中の一人の元老詩人<sup>66</sup>」に近かった。ちょうど金玼燮が運営していた『自由文学』も財政難で廃刊となり、彼は1965年に高血圧で卒倒し、闘病生活を送るようになる。その終わり頃の1969年に4冊目の詩集『城北洞の鳩』（汎友社）が出版された。その後、『城北洞の鳩』は民音社でも何度も再版されて、1974年に一志社から詩全集が刊行され、1975年には「韓国随筆文学大全集」に彼の随筆と随筆文学論が収録されるなど、作家としての作品集が出版されるようになる。『城北洞の鳩』出版直後、彼は相次いで二つの賞、文化芸術賞（1969）と国民勲章牡丹賞（1970）を受賞する。

同年、画伯<sup>キムファンギ</sup>金煥基が第1回韓国美術大賞展の大賞受賞作に金玼燮の詩「夕暮れに」の最後の句節「どこで何に生まれ変わってふたたび出会うやら（어디서 무엇이 되어 다시 만나랴）」をタイトルにつけたことで、メディアでも金玼燮の詩が注目されるようになった。まさにここで、金玼燮は「詩人」に生まれ変わったのである。進歩的な青年文壇も、彼らが対立していた政府も、団結しなかった芸術界でも、彼を「民族詩人」と呼ぶことに躊躇しなかった。思想や主義、世代を超えた「民族詩人」という呼称は「愛国—国民—民衆」の意味を含んでいたのである。

## （2）若い創批と元老詩人との出会い

彼の最後の出版物は、創批で発刊された詩集『冬の日』（1974）と『私の獄中記』（1976）である。彼の年齢や1940～1950年代の官職の前歴を振り返れば、若い創批との出会いはややぎこちないところがある。高銀<sup>ユンギン</sup>は、蒼々

---

<sup>66</sup> 고은 「나의 산하, 나의 삶, 176」 『경향신문』 1995. 10. 29.

とした権力をめぐり健康も失った晩年の金玟燮が「第2共和国時代には謹慎中のある元老詩人としてのみ存在<sup>67</sup>」しなければならなかったと回顧している。そのような元老詩人が最後の詩集と獄中記録を創批から出すことになったのである<sup>68</sup>。

『城北洞の鳩』の詩人でありながら、各種勲章の授与者であり、「民族詩人」としても遜色のない金玟燮は、1974年『全集』のあとがきを通して、1930年代に自身がほめかしていた抒情詩論を翻す発言をしている。

詩は私にとっては単純な感情や叙情ではなかった。詩人は民族意識の先端に立つ。私たちの状況意識がすぐ民族意識となった。そのような観念が私のあらゆる感情の底辺となり、精神の支柱となって、その観念が動力化して獄中での苦しみまで経験するようになってしまった<sup>69</sup>。

詩人が「民族意識の先端」に立って時代に参加してこそ、その真正性を確認することができるようになった時代の流れのなかで、彼は「叙情」を間断なく捨てなければならなかったのである。彼は、国家権力や制度に対する関与や抵抗も事実上不可能に見えた日帝時代には、文学の定数として叙情詩を、そしてそれに最も近いものを随筆に見て、時代や階級ではなく、生活と人間を人格的な随筆文学の本質として言及していた。そして解放後には、自分が実のところ何かの「個性」で詩人になったのではなく、「時代的環境」が育てた「意識」によってなったという(307)。自身の投獄が

<sup>67</sup> 고은, 前掲文。

<sup>68</sup> もちろん金玟燮という一人の人物の晩年を、創批という出版社の性格を通じてのみ把握することはできないだろう。彼のその他のあゆみと詩の世界、そして解放後の情勢に対する積極的な考慮が必要ではあるが、創批で出版された彼自身の叙事を中心とする本稿の論旨と紙幅の関係上、このような点は別稿で改めて取り上げたい。

<sup>69</sup> 김광섭 「시예의 등장」 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976, 375쪽.

まさにそうした「民族意識」の結果物だと付け加えている。そうならば、「獄中日記」は民族意識の結果というわけである。

彼の「最後」の詩と自伝的文章のすべてがどのように創批と出会ったのかについては、1969年の詩集の出版と1974年の改憲署名支持運動という事件を通じて明らかにすることができる。これは、彼に対するその後の文壇における評価、文学史での位置付けを理解する重要な鍵となる。

創批は、1966年に創刊した季刊誌『創作と批評』を筆頭に、1971年から黄<sup>ファンギョン</sup>皙<sup>リョンヒ</sup>暎、李泳禧、白樂晴それぞれの小説集、批評集、論文集を出版し、進歩的な出版社としての色彩を創り出していった。彼らは30代前後の若さで、血気盛んであった。金玼燮と彼らとのあいだの世代のギャップは、一冊の詩集を媒介に広がるようになる。『城北洞の鳩』発表直後から『創作と批評』に載せられるようになった3編の「金玼燮論」は、金玼燮に対する創批側の立場をよく代弁している。金<sup>キムヒョンスン</sup>顯承、趙<sup>チョテイル</sup>泰一、申<sup>シンキョンニム</sup>庚林の手を經た「金玼燮論」は、時間が経つにつれ、具体的な言語を通じて明確なアイデンティティーを与えられるようになる。

1969年、金顯承は金玼燮が海外文学派出身として初期には「觀念の正体」があいまいな詩の世界を見せていた反面、同年に発表した『城北洞の鳩』を通して、「根源における郷愁」と「社会批評の意識」を「具体的」に表現したことを評価した。彼は「晩年に至るほどさらに輝いて旺盛で円熟し」はじめた金玼燮の詩の世界を高く評価している<sup>70</sup>。

そして1970年、趙泰一は金玼燮の詩の世界の流れが抗日から反共に、愛国から文明批評に向かっており、彼の40年の詩の世界が「止まっている詩」に対比される「動いている詩」だったことを称賛した<sup>71</sup>。参考に、1941年生まれの趙泰一は、慶熙大國文科に在学していた当時、金玼燮の配慮で契

<sup>70</sup> 김현승 「김광섭론」 『창작과 비평』 13, 1969. 3, 130~140쪽.

<sup>71</sup> 조테일 「고여 있는 시와 움직이는 시」 『창작과 비평』 16, 1970. 6.

学金をもらい、大学生生活を維持することができたという<sup>72</sup>。

金珽燮が創批で詩集『冬の日』を出版した年に掲載された申庚林の「金珽燮論」(1975)は、創批の「金珽燮論」をもっとも明確な言語で具体化している。申庚林は当時、「民族詩人」、「愛国詩人」とされる、それでいて「民衆」や「庶民」とは距離があった詩人金珽燮の「詩についてあまりにも知っていることが少なかったことに気づき、驚いたこと」を告白することから「金珽燮論」をはじめ<sup>73</sup>。彼は知的で抽象的、観念的といえる金珽燮の初期における詩は、彼が社会活動から退いた1960年代後半から「民衆または庶民との一体感を回復」したとみており、その根拠に『城北洞の鳩』を挙げている。金珽燮はここにはじめて「名実ともに」「民族詩人という名誉」を獲得するようになったのである。申庚林の「金珽燮論」は「このような難しい時代に金珽燮氏のような優れた詩人に出会ったことは私たちの喜びであり、なんとという慰めなのだろうか」という最後の献辞にも表れている。

つまり、季刊誌『創作と批評』において創り出され続けた金珽燮に対する評価は、「かつて詩の世界さえともに把握されなかった文人」から、1969年の『城北洞の鳩』を起点に「庶民を感じた民族詩人」として急転回する場面を示している。金洙暎<sup>キムスヨン</sup>もまた、白樂晴などの創批側に、金珽燮と金顯承が重要な詩人であるから、彼らに詩を依頼することを勧めたという<sup>74</sup>。ところが、1961年に金珽燮が社長を務めていた『自由文学』において、政府を称賛すると同時に否定する内容を含んだ金洙暎のいわゆる政治的な詩に原稿料を与えて掲載の意思を明らかにしようとする、金洙暎は自ら修正撤回の意思を明らかにしたことがあった<sup>75</sup>。当時、金洙暎が相対した人

<sup>72</sup> 정규용 「정규용의 문단 뒤안길 1980년대 <41> -시에 자기 사망일 밝힌 조태일-」 『중앙 Sunday』 2012. 1. 8.

<sup>73</sup> 신경림 「김광섭론」 『창작과 비평』 37, 1975. 9.

<sup>74</sup> 최하림 『김수영 평전』 실천문화사, 2001, 348쪽.

<sup>75</sup> 강홍규 「관철동 시대 70년대 한국문단풍속화29」 『경향신문』 1986. 10. 25.



は編集長である李圭憲<sup>イギョホン</sup>であって、掲載決定を下したのも彼であったが、金洙暎は、『自由文学』の責任者である金玼燮にも心の借金があったはずだろう。

1975年、『文学と知性』に掲載された金柱演<sup>キムジュヨン</sup>の「ある詩人の一生について」においても、金玼燮の詩が「私たちの心の中に積極的にぶつかり始めたのはわずか6年前、1969年に『城北洞の鳩』を出したあとから」であることを公表したことがある<sup>76</sup>。金玼燮は、韓国文壇全体のなかで1969年にはじめて「民族の詩人」になったのである。ある研究者は、彼がどうであれ、韓国文壇を作り上げた貢献者であるにもかかわらず、素朴にただ「詩人として記憶される理由」について、国文科で弟子を量産した金東里<sup>キムトンリ</sup>、趙演鉉<sup>チョヨンヒョン</sup>などとは異なり、短い時期だけ英文科に在職したためではないかと述べている<sup>77</sup>。金玼燮が韓国文学史において、「海外文学派」程度に簡略に記録されてきた点を考えれば、これは現実的な分析であるといえる。

金玼燮は創批から好評を得るようになった後、若い作家たちと政治的同志としての人脈も形成するようになる。1974年1月7日、彼らはある地下のカフェで会っている。

李熙昇<sup>イヒスン</sup>、李軒求、金玼燮、安壽吉<sup>アンスギル</sup>、李浩哲<sup>イホ Chol</sup>、白樂晴氏などの文学者たちは、7日午前10時、ソウル中区明洞1街コスモポリタン地下のカフェに集まって声明書を発表し、「大多数の同胞たちが貧困と圧制に悩まされ、民族の存亡そのものが危うかったこの難しい時期を迎えて、文学者たちはこれ以上沈黙できない」と宣言して、「未来の韓国文壇と社会に新たな風土を醸成するため、改憲署名を支持する」と明らかにした。

（「文人 61名 改憲署名を支持」『東亜日報』1974. 1. 7.）

<sup>76</sup> 김주연 「한 시인의 일생에 대하여」 『문학과 지성』 6(1), 1975. 3, 136~145쪽.

<sup>77</sup> 홍정선, 前掲論文, 347頁.

「61名の文人が署名し、20名が参席したこの日の集まり」で、記事を通じて実名が挙がっている彼らは6人、「朝鮮語学会事件で投獄された咸興<sup>ハムン</sup>刑務所で、ご飯一さじを100回噛んで飲み込んだ」という逸話で有名な李熙昇を筆頭に、李軒求、金玼燮、そして最後に白樂晴がいた。ほぼ年齢順であるとともに、当時の認知度の順で取り上げられたと見ても差し支えはない<sup>78</sup>。彼らは、「民族文学の担い手」と「良心の自由と表現の自由を含めた国民の基本的人權」の保障に向けて「憲法改正を請願」し、そして「民主主義と社会正義」のために「良心的知識人」が「国民の側に」立つことを宣言した。金玼燮はこの関与を通じて、詩の世界を通じてだけでなく、現実世界を通じても、民主主義と社会正義を支持する「民族文学者」であり「良心的知識人」グループに正式に合流した。

李軒求が『私の獄中記』の「まえがき」で白樂晴に格別な感謝を表したこと、そして白樂晴が「編集後記」で李軒求と金玼燮に丁重に言及したのは、彼らの関係をよく表している<sup>79</sup>。創批が1975年に金玼燮詩集『冬の日：金玼燮詩選集』、1976年に『私の獄中記』を出版したのは、1969年に『城北洞の鳩』によって民衆詩人、文明批評の詩人の系譜に至った詩人金玼燮に対する歓迎であると同時に、1974年における進歩的知識人の政治的な支持者として関与しながら、文壇の若い血気に元老の力を貸してくれたことに対する感謝の表現だったのである。このことによって、金玼燮には「抗日・反共」に加えて「抵抗・参与」というコードが刻印される。そしてこれらのコードはすべて「民族」というしるしに収斂されたのであった。

<sup>78</sup> 1995年のある回顧は、白樂晴、金芝河<sup>キムジハ</sup>、廉武雄、李熙昇、李軒求、金玼燮、安壽吉、朴斗鎮<sup>パクトジン</sup>、朴永熙の順で「3選改憲永久政権反対」者たちを記憶している（고은「나의 산하, 나의 삶 150회」『경향신문』1995. 2. 12.）。文壇の主導勢力の交代は、1974年当時メディアでまだ主要な人物として言及されていなかった金芝河、廉武雄を取り上げて、白樂晴をすべて手放すことによる変化を生んだ。

<sup>79</sup> 高銀の回顧によれば、金玼燮が抵抗の時代に立つために決心し、李軒求も淡々と署名に承諾することができたという（고은「나의 산하, 나의 삶, 143」『경향신문』1995. 3. 5.）。

金玟燮は自身の日記が最初に世に出た1961年の感慨を、次の文章で再解釈し始めた。「この日記は、悲しみの自由もなく、涙の自由もなく、西大門刑務所の独房に収監された日によって生じたのであり、出獄してから17年、4.19以降の重苦しい時間に出ようになるのである<sup>80</sup>」と。1961年、「4.19以降の重苦しい時間」を強調し公開された彼の日記は、1969年『城北洞の鳩』で民衆的な民族詩人の序列に上がり、1974年の改憲署名に合流した後、創批を通じて獄中記が出版されたことによって注目されるようになる。風聞だけで聞いていた彼の投獄と「抵抗」の経験は、ここに物質的な証拠として提出されたのである。さらに、1970年代は若い作家たちが刑務所に入るようになる時代で、1976年に出版された金玟燮の獄中記は、抑圧的な権力に対する抵抗という時代的な響きを与えて出版されたのであった。

## 5. 結論

これまで、金玟燮の『私の獄中記』を対象に個人的な叙事が「執筆—出版—読書」される過程と獄中記／日記、回想記などといったジャンルが再現するアイデンティティーの違いとその結びつきの効果を明らかにした。そして何より、テキストの社会的な理解は叙事の詳細な内容よりも、該当ジャンルの受容の中で位置づけられているという点に注目して、その全般的なイメージを把握する作業も合わせておこなった。「自己叙事」の出版が個人的、社会的な結び目になる事件であることを示すため、『私の獄中記』の単行本による出版を前後した、金玟燮個人の履歴や文壇との利害関係を整理した。

本稿は、知識人が韓国近現代史の歴史的な浮き沈みのなかで、いかなる個人記録の改変を通じて世渡りをしたのかを批判しようとしたのではない。

---

<sup>80</sup> 김광섭 「옥창일기 -머리말」 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976, 11쪽.

植民地期における金玟燮の日記は、解放後に2度にわたって脚色の機会を得たのにもかかわらず、依然として「絶えず刑務所の規律に順応することを念押し<sup>81</sup>」する内容を盛り込んでおり、これを読解する研究者をしても、「愛国章を授与された独立運動家として日記を読むと、すぐ困惑」せしめてしまうようになる。つまり、彼の獄中記は、社会的に抗日と反共のスローガンが顕著だった1960～1970年代に公開されたのにもかかわらず、露骨な脚色までは加えられなかった。抗日に反共、そして抵抗が加わる場面まですべて正直に含めており、歴史的な地層を示しているのである。もちろん、個人的な叙事の執筆や修正には、筆者個人の意図と欲望が反映されているが、作家の手を離れたこのテキストは、社会文化的な文脈のなかで消費されたのである。

この「自伝文集」は、表面的には獄中と病床にあった時期の記録である日記、回顧録、病床記で構成されている。このような組み合わせの出版は、私的な日記 (diary) が公的な回顧録 (memoir) と出会い、民族的な自叙伝 (autoethnography) の色彩を帯びるようになり、そして獄中記 (prison writing) と病床記 (autopathography) が会うことによって、ある知識人の政治的／詩的な生存叙事 (survival narrative) として完成される場面をよく表している<sup>82</sup>。金玟燮自身は、これまで発表されたさまざまな文章を「一冊にすべて盛り込むことがどうなるかを躊躇する考え」を示したが、これらの文章は身体の拘束という条件のなかで、精神の自由と修練が行われていたことを再現する効果をもたらすようになったのである。

81 장신 「일제하 형무소의 사상범 대책과 전향자 처우」 『민족문화연구』 64, 2014. 8, 179쪽.

82それぞれの用語については、Sidonie Smith & Julia Watson, *Reading: A Guide for Interpreting Life Narratives* (University of Minnesota Press: Minneapolis, London. 2001) を参照。

## 参考文献

### ○新聞・雑誌

『경향신문』、『동아일보』、『삼천리』、『신천지』

### ○著書・論文

- 권영식, 송문영 공편 『역사에 던지는 목소리 : 일제치하에국역사, 학병, 강제징용자, 여자정신부의 수기』 동광, 1980.
- 김광섭 『나의 옥중기』 창작과 비평사, 1976.
- 김성연 「근대의 기적 서사 <헬렌 켈러 자서전> 의 식민지 조선 수용 -“불구자”, “성녀”가 되다-」 『사이間 SAI』 13, 2012. 11.
- 김성한 「1970년대 논픽션과 소설의 관계 양상 연구 - 『신동아』 논픽션 공모를 중심으로」 『상허학보』 32, 2011. 6.
- 김영민 『한국현대문학비평사』 소명출판, 2000.
- 김주연 「한 시인의 일생에 대하여」 『문학과 지성』 6(1), 1975. 3.
- 김철 「한국보수우익 문예조직의 형성과 전개」 『실천문학』 18, 1990. 6.
- 김학동 외 『한국문학사조론』 새문사, 1995.
- 김현승 「김광섭론」 『창작과 비평』 13, 1969. 3.
- 『국가기록원 일제문서해제 -행형편-』 기록정보서비스부 기록편찬문화과, 2012.
- 박대현 「『다리』誌의 현실참여와 행동주의의 의미」 『한국문학이론과 비평』 17(3), 2013. 9.
- 신경림 「김광섭론」 『창작과 비평』 37, 1975. 9.
- 신형기 『해방 직후의 문학운동론』 화다, 1988.
- 안중근 저, 이은상 역 『안중근의사 자서전 : 안중근의사 옥중집필』 안중근 의사 숭모회, 1979.
- 염무웅 「책 읽기, 글 쓰기, 책 만들기 -내가 살아온 시대의 가난한 초상」 『근대서지』 4, 2011. 12.
- 염희경 「일제 강점기 번역 번안 동화 엔솔러지의 탄생과 번역의 상상력(1)」 『문학교육학』 39, 2012. 12.
- Wilde, Oscar 저, 임현영 역 『옥중기』 범우사, 1976.
- 윤병석 감수 『일제하 옥중 회고록 1』 정음사, 1977.
- 이보영 「Oscar Wilde 문학의 수용과 그 한국적 변용」 『세계문학비교연구』 1, 1996. 4.
- 장세봉 「어느 혁명운동가의 옥중편지」 『한국근현대사연구』 52, 2010. 3.
- 장신 「일제하 형무소의 사상범 대책과 전향자 처우 -김광섭의 「獄窓日記」를 중심으로-」 『민족문화연구』 63, 2014. 8.
- 정규용 「정규용의 문단 뒤안길 1980년대 <41> -시에 자기 사망일 밝힌 조태일-」 『중

- 양 Sunday』 2012. 1. 8.
- 정병욱·이타가키 류타 편 『일기를 통해 본 전통과 근대, 식민지와 국가』 소명출판, 2013.
- 조태일 「고여 있는 시와 움직이는 시」 『창작과 비평』 16, 1970. 6.
- 최하림 『김수영 평전』 실천문화사, 2001.
- 한형구 「한국 탐미주의 비평의 한 사례 -1930년대 후반 김문집 비평의 문단 위상과 그 미적 이론의 형성 배경」 『어문론집』 47, 2011. 7.
- 홍정선 「김광섭, 시인이란 기억 뒤의 문단 건설자」 『한국사 시민강좌』 43, 2008. 8.
- Doran Larson, "Toward a Prison Poetics", *College Literature*, 37(3), 2010.
- Philippe Lejeune, edited by Jeremy D. Popkin & Julie Rak, translated by Katherine Durnin, *On Diary*, University of Hawai'i Press, 2009.
- Sidonie Smith & Julia Watson, *Reading: A Guide for Interpreting Life Narratives*, University of Minnesota Press: Minneapolis, London. 2001.

にしむらなおと  
(西村直登 訳)